

研究報告

北翔大学ポルト市民講座『若者の生と死を考える～ 「(周囲が) 死なせない」よりも「(若者自身が) 生きてみよう」 と思えるために私たちにできること～』

飯田 昭人¹⁾ 村尾 政樹²⁾ 齊藤 美香³⁾
三上 薫⁴⁾ 丸岡 里香⁵⁾

1) 北翔大学教育文化学部心理カウンセリング学科 2) 子どもの貧困対策センターあすのば 3) 北海道大学保健センター
4) 北翔大学保健センター 5) 北翔大学教育文化学部教育学科

抄 録

本研究報告は、平成27年1月17日(土)に開催されたポルト市民講座『若者の生と死を考える～「(周囲が) 死なせない」よりも「(若者自身が) 生きてみよう」と思えるために私たちにできること～』における講演録の文章を加筆修正して、研究報告としてまとめたものである。

ポルト「健康」研究グループ代表、本学心理カウンセリング学科の飯田より企画趣旨を行った。その後、飯田と、本学保健センター三上より『青年期の居場所感・所属感を考える～休学や退学の現状を参考に～』と題し、話題提供を行った。そして、元運営会(現在、子どもの貧困対策センターあすのば)の村尾氏より「若者の自殺を考える～生きづらさを生きる力に～」と題し、基調講演を行っていただいた。村尾氏の講演を受けて、指定討論者として、北海道大学保健センターの齊藤氏より質問及び意見を述べていただいた。

なお、当日は約60名の参加者の方々にお越しいただき、質疑応答も多く活発な議論ができたことを付言したい。本講座の内容がこれからの自殺予防活動に少しでも寄与できればと思い、改めてここに当日の市民講座でのやりとりを再現したいと考える。

キーワード：若者、生きる力、自殺予防、市民講座

【飯田 昭人】

企画者の飯田です。このポルト研究の健康グループ代表を務めています。どうぞよろしくお願いいたします。普段は、大学教員として心理学を教えています。また臨床心理士として、病院、療育センター、スクールカウンセラー、警察心理職などを経験してきました。

自殺にまつわる市民講座は昨年に引き続いて2回目でございます。シンプルに申しますが、わたしがお会いする中学生や高校生、そして大学生の中に、「死にたい」と話す方々がいます。その多くは「大人は死んではいけない」「死なないで」「死ぬ気になれば何でもできる」などばかり言われ、「死にたいくらいつらいという自分の気持ちをなかなかわかってもらえない」とその気持ちを吐露されます。もちろん、心配している大人はたくさんいますが、死を考えている若い方たちは、自分の気持ちをわかってもらえないと思っている人が相当数いると思

います。

今回のテーマも「若者自身が生きてみようと思えるために私たち大人にできること」を大切にしていきたいと思います。



はじめに、飯田、三上による大学での休学や退学の状況に焦点を当て、居場所感や所属感の視点から若干の提言を行います。その後、村尾政樹氏による「若者の自殺を考える～“生きづらさ”を生きる力に～」と題し、基調講演を行っていただきます。最後に、齊藤美香氏を交え、シンポジウムを開催し、質疑応答も受けたいと考えています。

まず、私より若干の企画趣旨と自殺についての情報をお話いたします。

2012年の全世界の自殺死亡者は、2014年のWHOによると、推定80万4千人。全世界の人口10万人あたりの自殺死亡率は11.4になります。ちなみに男性15.0、女性8.0となっています。ただし、これらの数値は過少報告されている可能性があります。世界のほぼすべての地域で、男女とも70歳以上が最も自殺死亡率が高いといわれ、また、世界的に見ても自殺は15歳から29歳の死因の第2位になっています。成人1人の自殺による死亡には、20人以上の自殺企図があると指摘されています。

2014年の内閣府自殺対策推進室、警察庁生活安全局生活安全企画課における、平成25年中における自殺の状況からは次のようなことが言われています。平成25(2013)年、日本の自殺者の総数は27,283人で、前年に比べ575人(2.1%)減少しました。男性が18,787人で全体の68.9%です。年齢階級別では、60歳代が全体の17.3%、40歳代16.8%、50歳代16.4%、70歳代13.9%と続きます。職業別自殺者数では、無職者が16,465人60.3%、被雇用者・勤め人26.7%、自営業・家族従業者7.8%、学生・生徒等3.4%と続きます。北海道の自殺者は、1,246人(H25)、1,296人(H24)となっています。平成25年度では、20歳未満が25人、20-29歳が118人、自殺で亡くなっています。

統計等の資料を紹介していきしましたが、社会の要請として、「自殺をさせない」「自殺してはならない」というのは、ある意味において正しいといえます。そのために、自殺「予防」や自殺「対策」などのことばが当然用いられます。しかし、自殺を考えている「当事者」からすると、自殺予防や自殺対策ということばは、「死にたいくらい“つらい”」という想いを否定されたように感じるかもしれない。それは、先ほども述べましたが、臨床現場で痛感することです。「死を考えてしまう私は“弱い”人間、“だめな”人間」と感じてしまうかもしれない。こういうことにも思いを馳せたいと考えますが、皆様はいかがでしょうか。

自殺問題に携わるすべての人間は自殺の社会構造的側面と、自殺を考える本人の想いや気持ちに焦点を当てることの双方をしっかりと考えていく必要があると考えます。

続けて、青年期の居場所感・所属感を考える～休学や退学の現状を参考に～というテーマでもう少しお話させていただきます。

内田千代子先生(2014)の2011(平成23)年度の在籍学生の調査によると、全体休学率 2.72%(男子2.92%、女子2.33%)全体退学率 1.32%(男子1.62%、女子0.75%)となっております。つまり、全国的に見て、休学が約2.7%、退学が約1.3%であります。本学については詳しい数字は差し控えますが、休学率はこの調査より低いものの、退学率はこの調査より高くなっています。この違いは、地域性、学部学科の特色、入ってくる学生の背景、いろいろな要因があると思います。

内田先生(2014)による退学および休学の事由グループの分類基準としては、表1のとおりです。

表1 内田(2014)による退学および休学の事由グループの分類基準

- | | | | |
|-----------|--------|--------|------------------------|
| 1. 身体疾患群 | 休0.12% | 退0.02% | |
| 2. 精神障害群 | 休0.24% | 退0.06% | |
| 3. 消極的理由群 | 休1.03% | 退0.72% | (大学教育路線から離れるような理由。) |
| 4. 積極的理由群 | 休0.79% | 退0.28% | (大学教育路線上にあり、さらに積極的な理由) |
| 5. 環境要因群 | 休0.53% | 退0.17% | |
| 6. 不詳 | 休0.17% | 退0.13% | |

休学や退学、そして引きこもりや孤立などは、自殺の危険性が高まります。大切なその個人の「居場所感」や「所属感」とでも呼ぶべきものが失われるからです。居場所感について、石本(2010)は「ありのままでいられる」と「役に立っていると思える」ということが含まれた、物理的・心理的な居場所と定義しています。所属感については、大阪府教育センターは(1)所属感(belonging)とは、①心の居場所、②自分のあるがままの存在を認める。「私は私」と定義しています。

所属感や居場所感が脆弱になってしまうことにより、話せる人、心を許せる人が少なくなる。誰かを頼る、誰かに頼られるという経験が乏しくなる。このことは結果として、自分に自信がなくなる、極端な思い込みで走ってしまうということにつながります。すると、誰も頼れなくなる、この世から離れようとする可能性が高くなるということに行き着くと考えます。

私たちにできることは何でしょうか。「挨拶、声かけをする。」「会話をする、できる範囲で一緒に過ごす。」「誰かにつなぐ、各種機関に相談する。」など、身近なことこそ大切であり、専門家や専門機関に任せっきりにするのではなく、自分たちのできることは何かを常に考えていくことこそ大切であると思います。理想論かもし

れませんが、「打てば響く」というような関わり、たとえば、つたない言葉であっても相手（大人）がその意図を汲み取り、反応することで、（人と関わることに不得手な）若者世代の人間も、それなりの自信をもって人と関わるができるようになるのかもしれませんが。多少おせっかいで若い世代と接することが大切だと私は考えます。

続きは、三上看護師や、村尾さん、斉藤先生がお話してくださると思います。どうもありがとうございました。

【三上 薫】

私自身がこういう場で話すのが、すごく苦手で、穴があったら入りたいと思って、いつもこういうところは、来ないようにしているのです。こういう気持ちで、保健センターに来る学生さんたちにも多くって、自分の苦手なことに遭遇した時に、穴があったら入りたいという思いに駆られているように感じています。それはレポートのこととか、テストのこととか、先生との関係とか、お友だちの関係で、穴を掘って掘って掘って、もう下の方へ下の方へと掘っていく学生さんが結構います。この前もある学生が、保健センターに来た時に、後ろ向きに前向きだと。後ろ向きをどんどん前に向かって歩いているのだという話をしてくれました。

多分、死にたいなあと言っている学生さんは、穴を掘って掘って掘って、もう抜けられなくなっているような状況の人が多いいと思います。休学する場合でも、死にたいというふうに言う学生さんがいらっしやいます。そこで、どうして死にたいかというのをいろいろ聞くのですけれども、そうすると、やっぱりこの人、辞めた方がいいのかなとか、休学して少し自分の考える時間を持った方がいいのかなと思うような学生も大勢いらっしやいます。

大学に入ってきた時に、きちんとした目的意識がなかったために、とりあえず大学に行ってみれば、という



ようなことを言われてきたのだけれども、入ってみたらなんとなく違うという人も結構います。そういう時には、じっくり話をして、じゃあ、ちょっと大学から離れて、そして考えてみればという話もしています。

休学が悪いというふうには本人は思っているみたいですが、そうじゃないのだということも気付いてもらいたいと思っています。

退学する人もそうですけども、結構、休学期間に自分を見つめなおして、やっぱり大学を辞めようという人もいるので、そのへん、ちょっと期間を置いて自分を考えるということも必要なんじゃないかなと思って、いつも接しています。

死にたいって、言われる機会も度々ありますが、死じゃだめだよというのは、あまり言わないように心掛けています。話をしているとどんなふうにして死にたいの？ということを私はいつも聞くのですよね。それは、危険なことなのかも知れませんが、そうすると、ああ、この人ちょっとわかってくれているのかなと思ってくれるようです。話しているうちに、違う話に移って行って、じゃあ、今日のご飯なに食べると言ったら、今日はあれ食べますという答えが返ってくるんです。今日1日、それで過ごして、明日もまた来て、また死にたい話でもしようかって、いうことになったりするんです。

そんな形で、ほんとに、ちょっと利他的ではあるかもしれませんが、時間という日にち薬は重要だと思っています。

私は、看護師なので言葉というよりも顔色を見たり、ちょっと表情を見たりして、あ、ちょっとこの人かなり悩んでいるなというのを感じると病院を勧めてみたり、あとは食べもの、ちゃんと寝ているのかというようなこともアドバイスするようにしています。

そのような形で、保健センターでは、休学している人も、いつでも来てねというふうに声かけています。やっぱりどこかに所属していないと不安というのがあると思います。これからは辛くなったら、待ってますよという姿勢で見守り、支えることを続けていこうと考えています。以上です。

【村尾 政樹】

皆さん、こんにちは。村尾政樹と申します。どうぞ、よろしくお願いいたします。

まず、初めにとということなのですが、本日、ちょっとお話しさせていただくのが、すごい今、怖いのですよね。いつも何かの形でいろいろお話をさせていただくことがあるのですが、いつも、後ほどご紹介させていただくような活動のお話であったりとか、あとはよくあるのは、こういった経験を通してどういうふ



うに前向きになれているのかというようなポジティブなお話をしてくださいというようなことが多かったです。ですので、ちょっと今日は、あんまりポジティブでもないのかなというようなお話なので、初めましてのかたも大勢いらっしゃいますけれども、今まで何度かお会いしたことがあるかた達にとっては、僕はなんだか話してはいけないようなことを今から話す、かかわってくださっている方々にとっては、あまり話してはいけないようなことを話すような気がして、ちょっと怖いのです。

本当に、最初ということなのですが、いつも自殺、「母親を亡くした」というところにすごいスポットが当てられるのですが、今日はここをまず大前提にお話しさせていただこうと思っています。非常に言いたくないのですが、僕は何度か死にたいと正直思ったことがあります。この死にたいという言葉は、どういう「死にたい」なのかということとかは、この後のいろんなお話を通して、少しずつ話していきたいと思っています。

今回、北海道の若者の自殺ということだったので、本当に基礎的な基礎なのか、数字だけなのですが、今、毎月大体約100名のかたが、自殺という形で亡くなっているということなのです。若者、とりわけ20代は、この平成24年で184名、平成25年で143名が自殺で亡くなっていると言われています。先日、平成26年の自殺の速報値が警察庁から出て1,151名だったということでした。

私自身のことなのですが、今、おかげさまで24歳になりました。兵庫県の神戸市の出身です。11歳の時に母親を亡くしました。大学進学の際に北海道札幌市へ来たので、18歳までは神戸市で高校生活を送っていました。

2014年の春、ちょうど1年ぐらい前ですが、大学を卒業して、現在は札幌市内で働いています。

まず、母親が死ぬまでのお話なのですが、僕が小学校5年生の時だったと記憶しています。その小5の

時ぐらいだったと思うのですが、母親の様子に異変がまず起きて、専業主婦だったのですが、家事をしなくなるというか、できなくなってしまう、寝込む日が増えたりという日が増えてきました。もともと黒髪なのか、茶色い髪だったのですが、金髪に染めてたばこを吸うようになったりとか、離婚したいって言い始めたりとかしました。僕は、小さい頃に、たばこがすごく嫌いだったのですよね。父がたばこを吸う人だったので、僕、すごくたばこが嫌いで、同じ部屋にいただけで、息がしづらいついとか、公言していたのです。家族に、たばこが嫌いだということは言っていましたし、そういう「たばこを吸う人なんか」というようなことも思ったりしていたのです。ですから、よけいに母親がたばこを吸い始めたことは、僕にとってすごいインパクトがあったことなのです。後から父親に聞いたのですが、母親はもともと喫煙していたのですが、僕たちの子育てのためにたばこをやめたのだそうです。

それで、僕はその言葉を聞いて、正直、「子育て」というものをもうやめたのかなというふうに思ったのです。興味がないのかなって。たばこを吸うのは、子どもを育てるために止めていた。でも、今、僕の目の前でたばこを吸っているというのは、単純にやっぱり僕に興味なくなったのかなというふうなことを覚えています。

離婚したいということなのですが、その離婚したいというのも、母親が言ってきて、僕以外は止めなかったのですよ。あとの周囲は離婚すればいいと思っていた。母親も正直このままだったら、もう駄目になるということを書いて、離婚をしたいというふうに言っていたのです。

ただ、姉さんとか、あ、私には姉と弟がいるのですが、姉が2つ上で、弟は僕の5つ下だったので、弟は当時小学校1年生とか幼稚園という感じの時だったのですが、その離婚したいといった時に、姉は特別止めなかった。すごくクールな感じで、そうすれはいいということだったのですが、僕だけ、止めたのですよね。やっぱり離婚するというのはよくないと思っていましたし、むしろ、もともと母親が調子を崩して家事とかができなくなって、で、離婚したいなんて、なんて勝手なのだ。こっちは苦勞しているのだぞというようなことを小学校5年生の時の自分は思っていたのだと思います。離婚を止めました。結果的に離婚はしなかったです。

その離婚の話をした後に、家族に呼ばれて、マー君、僕のことで、離婚をしないでほしいと言ったから、離婚しないことにしたのだというふうに母親は言っていました。ただ、その後に、本当に数カ月後です。母親は死んじやいました。

離婚させておけばよかったと思っていますね。なんで止めたのだらうというのは今、すごく思っています。あの時に、僕は離婚を止めて、もっと家族でこういうふうな、父、母がいて、ご飯があったという、何か理想みたいなものがあって、それを押しつけてしまったから、母親は離婚をしないという道を選んだ。それが1つの大きなきっかけになってしまったのかなというのは、すごくショックで、今も覚えています。

母親は、調子の良い時と悪い時でまったく様子が違って、調子が良い時はマー君、マー君というふうに僕を呼んでくれるのですけれども、調子の悪い時は、他人というのか、お前は誰なんだというような感じでしたね。

僕は、そういう様子を見て、調子の良い時だけ、なに調子の良いこと言っているのだというふうに思っちゃったのですよね。本当だったら調子が良いことをすごく喜ぶべきだったかもしれないですけれども、調子が悪い時に他人のようなことをされて、調子の良い時だけというふうに言っていました。

総じて、本当にこの1年間、小学校5年生からの1年間は、母親に対して冷たいこともすごく言いました。なんでこういうことをしていたのだらうか、なんでこういうふうに僕は思ったのだらうというのは、今でもすごくあります。

2002年、小学校6年生の5月なのですけれども、実際に母親は自殺で死にました。いつもはここまでの話とか、この時の話をするのですけれども、怖いというのは、ここから先が実は、結構、あまりそこまで話したことはないの、死んでからというお話なのですけれども。

まず、やっぱり、一番に印象に残っているのは、父親と僕、実は朝早くに出て行って、僕が寝る頃に帰って来るような父親だったので、小っちゃい頃、キャンプに行ったような記憶はあるのですけど、実は父親と僕はあんまり思い出がないのですよね。結構、お母さん子でしたし、母親というのがすごい印象が強くて、僕、死んで初めて父親と面と面を、ものごころがついてからは、初めて面と面を向かったという記憶があって、その時に、父親にまず言われたのは、「自分でやってね」というふうに言われました。この「自分でやってね」というのは、母親が死んで、死ぬ前からそうでしたけれども、家事のこと、ご飯、洗濯物、そういったことを自分で、身の回りのことを自分でやってねと言われました。先ほど申し上げたのですけれども、僕には弟がいて、母親が亡くなった時、小学校1年生だったのですけれども、その弟の面倒もみてねと。お兄ちゃんなのだからと、いうふうに言われました。

この「お兄ちゃんなのだから」というのは、父親だけではなくて、お葬式の時もそうだったのですけども、その後もずっとそうだったのですけど、やっぱりいろんな人に言われましたね。「お兄ちゃんなのだから」ってすごく言われました。

弟を連れて一緒に学校から帰るといっても毎日でしたし、そのご飯をつくるというのも、弟の分をつくるというのもそうでしたし、弟の面倒をみるというのも、小学校6年生からしていました。

悲しいことがあったのにえらいねということも、すごく言われました。すごく悲しいことがあったのに、よく頑張っているね、よく負けずに頑張っているねって。

記憶がうる覚えなのですが、車に乗っている時に、近所のおばさんの車に乗っていて、その時に、神様は乗り越えられる試練しか与えないということをよかれと思って言っていたのだと思いますが、その近所のおばちゃんがそう言いました。神様は乗り越えられる試練しか与えないよと。がんばりなさいと。非常に辛かったです。

まず、神様がいたら、母親死んでねえとか思ったりしちゃうのです、僕は。そもそも、なんで母親、死ななきゃいけなかったのというのは、神様、答えろよというような気持ちでいました。その乗り越えられるというのも、何かすごく違和感があって、やっぱりなんか母親が死んでから、困難に負けない、頑張る自分をみてもらおうというイメージがきつとあったのかもしれないのですけれども、その頑張るに負けない自分という自分を、あの時はそういうふうに思っていないんですけど、今思うと演じていたなど。そういう役をしていたとすごく思っています。

大きな転機としては、高校1年生の時でした。僕は、それまで、自分のことで精一杯で、逆にいうと忙しくすることで、そういった母親の死というものと、僕はあまり向き合っていませんでした。すごく怖かったからです。なにか時間ができたときや寝る時がすごく怖かった記憶があります。

寝る瞬間、なにか考えちゃいそうで、できれば疲れて寝てしまというぐらいのほうよかったというのがあって、大きな転機は高校1年生の時に、僕は同じ境遇の仲間たちと出会うことができました。僕はお母さんを亡くしましたって初めて言えたのですね。なんで言えたのかというと、やっぱり、前に、私はお父さん、お母さんを自殺で亡くしましたというふうに言ってくれた高校生の友だちがいて、その子話を聞いていると、何か僕のことを今まで、ちょうど4年、5年ぐらい経ってからのだったのですけど、今まで4年間、5年間を知っているのじゃないのというぐらい似ていたのですね。非常に似た経験

で、僕もそうだったのだというような気持ちで、また、「僕は」って書いていますけど、「僕も」というような感覚が強かったですね。僕も亡くしましたというふうに話した記憶があります。

その時に、同じような境遇で、そういうふうに自殺で亡くしましたとか、実は自殺だけではないのですけれども、ほかにもいろんな形でお父さんやお母さんを亡くしましたと言っていた子の中の1人に、進学したいけど、お金がないから進学できないというふうに言っていた子がいたのですね。僕は、高校1年生の時だったのですが、その子は高校3年生で、夏に1回キャンプみたいのがあって、そこで話したのですね。そのキャンプには私はもう参加できませんということで、どうしてかという、大学生になればとか専門学生になれば、そのキャンプはお兄さん、お姉さんとして来られるのですけれども、お金がないから進学できない。だから、私はこれで最後、その高3の、その子は、お互い初めてだったのですけど、そのキャンプが、参加するのが。僕は来年高2でまだ行けると。その子は高3で、お金がないから進学しない、できない。で、最初で最後ですというふうに言っていたのが、すごく印象に残っています。その自分の経験を話したことと、同じような境遇で育ってきた友だちが言っていた進学したいけどというところのあたりで、僕は非常に何か力になれないかなというような、何か前向きにはなったというようながありましたね。僕は商業高校に進学して、大学には行くつもりはまったくさらさらなかったの、逆に言うと今の自分がこんな場所にいるというのは、奇跡的なことというふうに僕は思っているのですが。それは逆にこの経験、この時のこの言葉はほんとに大きかったです。

ただ、それで進学、最初は商業高校でするつもりなかったけど、最後は商業高校にしよう、学校生活も頑張ろうと思、そのことをお父さんに言いました。僕は大学に行こうと思うと。商業高校に進学したけど。やっぱり、父親が言ってきたのは、「自分でやってね」でした。

あの時は何も思いませんでしたね。「自分でやってね」って小6の時から生きてきているので、自分でやってねと言われても何も思わなくて、むしろやってやるよ、みたいな感じで、大学の、お金のこととか、生活のこととか、自分でやるということに対しては何も思わなかったのですけど、「自分でやってね」と言われてアルバイトを始めたり、勉強を頑張ったりしようと思いました。

ただ、僕は、何の時か覚えていないのですが、授業の時に、夏でしたね。高校の先生がほんとにいきなりだったのですよ。前後覚えてないのですけど。ただ、高校の

先生が、自殺で死ぬやつなんかゴキブリ以下やと。自殺で死ぬやつなんかゴキブリ以下でやり直せと言ってきたのですね。

僕は、なんだか、それ、母親をゴキブリって言われているような気がして、別にゴキブリごと否定するわけじゃないのですけど、何か母親がゴキブリだと言われてる気がして、もう学校へ行くのをやめました。

僕、商業高校で資格さえとれば、成績くれるような学校だったのです。進学するにも、資格を取って、一般入試というか、資格を取ることに専念して、学校は絶対行かないと思いました。高2の終わりぐらいだったという記憶があります。逆に言うと高2ぐらいまでは、ちょっとは学校に行っていたというところもあるから、なんとか卒業できたのだと思うのですけど、大体、僕、高校3年生はほとんど学校に行っていない。結果的に北海道大学に受かったのですけど、僕は実は卒業認定、1回おらないような感じだったのですね。高校卒業できないような感じだったのですけど。不登校で。ただ、僕はその時先生に正直に、そういうことがあって、僕は学校に行かないとしているのですっていうことを言って、なんとか補修を受けさせてもらいました。あとは、商業高校から北海道大学に進学というのは嬉しいみたいです。先生からすると。卒業した先輩というところに、北大の名前があるといいからって言われましたね。

まあ、そのときの先生に母親のことを言われたときのことはもういいのです。そこは感情が出てきちゃうので。

その時の先生、なんでそういうことを言ったのだろうなどというのは未だに思っています。ただ、余計にその気持ち、僕は母親に対して、いやゴキブリじゃないよと。母親はちゃんと生きていたのだよということをやんと言いたくなって思うようになったのは、逆にこの言葉があったからなのです。

もちろん、みんながそう思っているわけじゃないというのはわかっていますけど、先生に教室で、授業で、そんなことを言われて悔しかったですね。母親が死んだ証とかじゃなくて、ちゃんと生きたのだ、生きてきたのだよということ、ちゃんとみんなに言いたいと思って、今もこういうふうに活動しているというのも正直あると思います。

ただ、今回、若者の自殺について話してくださいということで、いろいろ振り返っていると、このKY事件というのは、それもそのゴキブリ事件というのはさっきも話したことですけど、仲良かった友だちが僕のクラスに、離婚、再婚を繰り返す家庭のお子さんがいて、毎学期ごとに何か名字が変わるのじゃないかというぐらいな頻度で変わる人がいたのですね。1年生の時はこういう

名字で2年生はこういう名字で、3年生はこういう名字でというので、僕のすごく仲良かった友だちのもう1人が、クラス祭みたいのが、文化祭みたいのがあって、クラスTシャツを作ろうというので、作るのですけど、出席番号順に背番号をつけようというのがあったのですね。その出席番号順に背番号をつける、ちょうどその時にその子（の親）は実は離婚をまたしちゃったのですよ。で、名字変わっちゃって、出席番号変わるわけですよ。その友だちは、両方とも仲良くてすごく信頼していたのですが、KYだなんて、KYだ。空気読めないというのが、昔流行っていたのですけど。そういう言葉が。僕が高校生の時、流行っていて、その空気読めないなということを使ったのですね。その人も、いわゆるお母さんが離婚している時は母子家庭だったので、ひとり親とか、そういう、もしくは子どもになにも関係ないのに、すごいKYだって言われて、その離婚して名字が変わった子にですね。もう先生が、先ほど話した先生もそうだし、友だちもすごくいやでした。進学さえできればよかったと。それこそ、また、忙しい毎日を過ごすのが、多分、好きだったのだと思います。そういうこと、むしろ考えなくてよかったので。8時から5時まで、僕はガソリンスタンドで働いて、6時から10時までは居酒屋で働いて、みたいのを結構していましたね。

それで、その居酒屋の社員さんがカッコいいバイクに乗っていて、僕も憧れて、中型のバイクの免許を取って、反抗というやつですかね。学校に行かない代わりに自動車学校に行くみたいな感じで、免許を取って、バイクを買って乗るとするのがすごく好きだったのです。

でも、あの時、僕、思っていたのですよ。父親から反対されていて、バイクに乗るなんて、いつ死ぬかわかんないぞと。裸で乗っているようなものだぞと。逆に良いなと思っていましたね。いつ死んでもいいやと思っていた。死にたいって、まだ、もうちょっと後に、明確に意識的に思うのですけど、死にたいイコール自殺したいじゃないような気もするのですよね。僕は、死にたいと思っていたけど、多分、自殺は、今もそうですけど、自殺は多分しないだろうなって、母親の件もあったしというような気持ちがあるのですけど。そうなるバイクに乗って速度オーバーして、死ぬばいいやというのは、それも自殺って言うのですかね。事故死というような形になるじゃないですか。形は一応。ぶつかったりとかすると。そういうのが、非常に僕にとっては良かったですね。今も良いと思っています。どちらかという。そういうふうに戻り回っていたなという記憶が今、その若者の自殺について考えていると、それはありました。

2回目の転機なのですからけれども、大学に来てからやっぱり、さっき話した母親も生きていたのだぞと。力にな

りたい。困っている人の力になりたいという気持ちもあって、北海道にやってきて、いろいろやってきたのですが、東日本大震災が起きたのですね。3月11日に。それまで、僕、結構いろいろな活動を頑張ろうと思ってやってきたのですけど。あの時を機に僕は何もできないのだなということを思いました。

後ほど、話させていただこうと思っていたのですが、今日1月17日で、阪神淡路大震災がちょうど20年になります。僕、神戸の出身で、被災した経験もあって、小さいころからいろんな人が支援してくれたから、今の神戸があるのだよというようなこととか、すごく聞いて育ってきていて、次、何か大きな災害があったら自分は力になる番だということを思っていて。自分は何もできないというふうに、逆に思ったというのは、4歳の被災経験で今度は自分が力になる番だと思ってきたのに、やっぱり自分は何もできないのだなということをこの時に明確に思いました。

大学に進もうと思ったのも、困っている人の力になりたいとか。そういう母親のことだったりとかしたので、逆に自分は何もできないと思ったら、もう大学もやめて全部一から人生を考え直した方がいいのかなというふうに思っていました。いろんな人に、一応、相談してからやめようと思っていたので、いろんな人に相談をして、大体の人たちは、こう言うのです。村尾だから、大丈夫だよ。今までもそうやっていろいろな苦しい経験をバネに頑張ってきたのでしょと。村尾なら大丈夫。頑張れる。できる…。

その言葉も非常にありがたかったのですけれども、僕は、あの時は正直、重荷でしたね。

その中で、1人だけ人間臭くて、そっちの方が好きだよと言ってくれた子がいたのです。逆に悩んだりとか、そういうふうには、何もできないと思っちゃったりとか、それってすごい、今までの村尾さんだったら、そういうところ絶対見せなかったよねと言ってくれた子がいたのですよね。その時に、初めて、自分がそういう弱いところというのか、駄目なところを人間臭くて、そっちの村尾さんの方がいいよ、そっちの方が好きだよと言ってくれる人がいて、非常に助かりました。非常に、この言葉は今も、すごく支えになっています。人間臭くてそっちの方が好きだよ、そういう弱い自分も含めて自分として見てくれること存在をここで知ることができました。ただ、やっぱり大学は休学しようというふうには思いません。もう1回、1年間いろんな経験とかいろいろ考えたりにして、今後どうやって生きていくのかということを考えていると思って、僕は海外に行くチャンスがあったので、そのチャンスと、そのいただいたものを生かそうと思って海外に行きました。トルコという国なのですけ

ど。

トルコでの1年間なのですが、僕は初めて、ここで明確に死にたいと思いましたね。

なんでなんだろうという不思議な感覚でした。日本人がいないまちだったのですね。日本語が話せない環境だったので、日本語というものを1年間あまり話した経験がないのですが、このトルコの1年間で。

いわゆる関係性みたいな、人間関係みたいなものをトルコで1から全部つくらなきゃいけないという中で、何か孤独感というもの、あれなのですかね、日本以上にわかりやすかったのですかね。自分の意識的にも。わからないのですが、何か死にたいって、どういう理由があって思ったのかというのはわからない。自分でも正直いってあんまりわからないのです。ある日、突然、寝る前に、あ、死にたいと思うことがあって、思っただけなので特別、行動には移していないのですが、死にたいなというのが、意識的に出てきたのが、今でもあの日の夜は覚えています。死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい。そう思っていました。

非常に怖いです。今、その気持ちを思い出しても。なんなのがよくわからないので。でも、死にたいって思っていました。

その行動には、弱虫なのか、なかなか移せない。死にたいというのが行動に移せないというので、トルコの僕が行った時にシリアが、シリアという国が、内戦が始まって、トルコが、軍機が落されたりとか、シリアの爆弾がトルコの国内に飛んできたりということがあったのですね。正直、良いなと思っていましたね。

そこに自分がいたら、死ねたなっていう気持ちですごくありました。

やっぱり、自殺じゃなかったのでしょうか。僕は。何かしらのあれで死んでしまいたいというのは、きっとその国境の近くに旅してみようかなという気持ちとかがすごくあって。なので、この感覚は不思議、今も不思議です。だから怖いです。

帰国、なんとかしたのですけれども、お金がなさ過ぎて、僕、一時期、札幌の借家というか、賃貸で借りたお部屋を出て、トルコに行って、戻ってきてということだったので、もう1回札幌でお部屋を探すところから始めなきゃならないという感じだったのですが、非常にお金がなくて、ホームレスというのか、お家がない状態で、2週間、3週間、ちょうど大学4年生になるので就活もしなきゃいけないということだったので、そういう状態で、非常に経済的に苦しかったなって、今、トルコから帰ってからの1年間は、そういう経済的に厳しかった時だったなって、いま思っています。

ほんとにいろんなことに、死にたいというのが出てきてから、そして帰って来てお金がなくて、お家が決まらなくてとか、いろんなことがあったりとかして、どうしようというふうに思っていたのですが、神戸にお世話になっている人がいて、その人が、矛盾とか、葛藤とか、そういうのって、ないよりあった方が良くって、今の政樹には、ということを書いてくれたのですよね。こういういろいろなことに対して、どうしようってなっている時に、悩んだりとかしていると、なに悩んでいたりするのだよって。しかもトルコに行ってきた1年間頑張ってきたのにという人、結構いたのですよね。

でも、何かこの人は、矛盾も葛藤も必要だよということを書いてくれて、生き急ぐなということを高校の時にアルバイトしていた居酒屋の店長に、トルコから帰って来ましたと言った時に、すごく言われたのです。頑張ったなとか、すごいなではなくて、生き急ぐなということを書かれて、「生き急ぐな」という言葉をすごく、生き急いでいたのかなあなんて、自分で思うのですけど。

ほかにもお世話になった人、僕のお母さんと同じぐらいの年なのですよ。もし、お母さんが生きていたら。40代ぐらいなのですけど、40後半ぐらいなのですけど。もし、母親が生きていたら同じぐらいの人で、なんだか息子って言うてくれるのですよね。

息子って言うてくれることが嬉しくて、でも申し訳なくて、他人なので。他人というか家族ではないので、ただ息子って言うてくれたらすごく嬉しかったりとか。それで非常に申し訳ないですということとか、その人には言ったのです。やっぱり、そういうので、なんだかんだ言ってお母さんじゃないしということとかもあって言ったのですが、将来、車買ってくれるくらいでいいよみたいなことをサラッと言ったのです。でも、多分この人、車を買ってほしいわけじゃないと思うのです。きっと。聞いている感じ。あと、生活している感じ。きっと車欲しくないのだろうなって。ただ、多分、僕にそういう気をつかわせないためだけに、車買ってねって、将来は出世して車買ってよということを書いてくれるというのが感じて、その人にはほんとに非常に感謝しています。

貧しい生活で、でも、僕、ある意味、自分の責任だと思っていたので、お金がないって、トルコに行って、お金がないって、それはトルコに行ったからでしょとなると、まあ、それはそうですよね、という感じだったのですけど。

また、別なカタなのですけど、今、東京にいらっしゃるかたで、そのかたもすごいお世話になっていたんですけど、『助けて』って言えないことを私は知っているか

ら]ということを書いてくれたのですよね。

今だから言っているのかな、わからないんですけど。その人、僕は何も言っていないですし、単純に挨拶に行っただけなんですけど、お金を渡してくれたのですよね。お金を渡してくれたこととか、金額がどうこうということではなくて、もうそのつもりでいたのが、すごいびっくりして、で、『助けて』って言えないことを私は知っているから」と言って、「迷惑だと思って受け取って』って言われたのですよね。

そういう人もいるのだなというのをすごく、あれがなかったら、僕、多分、就活もできていないですし、父親とかから、僕、「自分でやってね』ってというのは今も続いていますので、基本的にそういう仕送りとか、何かそういったような資金的な援助というのは基本的には受けない生活をしていますので、初めて仕送りというのか、そういうものをいただいたというような経験でした。

まあ、ほんとにいろいろあって、結局、東京に就職するつもりだったのですが、北海道に今残っていますというところが、ちょっと話をあんまり詳しく説明せず、に、ちょっと進めていきたいのですけれど。

ちょうど、ここ最近1年の話なんですけど、働き始めてから思ったのは、すごい体にボロが出始めているな、若いのになって、言われるのですけど、でも、小6からカップラーメンとコンビニのおにぎりが主食で、電子レンジでチンというのが、せめてもの良い料理と思うと、まあ、出始めてもおかしくないのかなと思ったりもしています。

まだ若いのに、頑張りなさいという人は、良い飯食ってきたのだなあっていうふうに思っています。わからないのです。僕、なにか最近、体にボロが出始めています。

ほかにも想像以上のいろんな地方都市って厳しいのだなと思ったりとか、学生時代とはちょっと違う考え方もあるな、出てきたなと感じたりと。これって別に僕だからとかじゃないと思うのですね。いろんな、誰でもそういうふうな経験って就職したらあると思っているのですけど、でも、非常に変わっていくという自分がすごく怖くて、村尾はもっとこうだったって言われこと、やっぱりあるのですよね。今でも言われますし。

でも、さっき言った東京の「私、『助けて』って言えないことを知っているから』って言う人が、こう言ってくれているのですね。味方だと思ってくれている限りは、何を言っても言われても、どこにいても、立場が逆転しても味方ですということを、メールだったのですが、これは。これを送ってきてくれて、ああ、なんだか、その言葉にちょっとなんて言うのですかね、安心しました。

ほんとに、ちょっとこういうふうに、流れのとおり話していったのですが、考えてみると、僕、多分、ほかの人よりも、「生きる」と「死ぬ」という間にあるような何か線みたいなのが、少ないというのか、細いというのか、もろいというのか、どれって言葉が一番正しいのかわからないのですが、そういうことを感じています。

何かイメージとしては、こんな将来への希望とか家族みたいものがあって、それによって生きるというのが、こっち側にあってみたいな。で、死というのはだいたい遠いかなという感じのイメージがあるのですが、何かこんな感じなのですよね。

穴が空いちちゃっているのです。僕のこの死までの線みたいところに。

なんでなんだろうなというのは、まあ、母親を亡くしたというのが明確に僕は心の穴というか、何か穴になっているというのは自覚しています。

先ほど話した震災を機に挫折したという経験は、すごいそこに穴みたいなものがあるなというので、何だか今、僕、こんな感じです。

非常にもろい状態で生きていると思っています。

今は「死にたいな』って、意識的には思っていないのですが、多分、自殺はしていないけれども、「死んでもいいや感』みたいなものは結構、多分出て来るのだろうなというのはあると思います。

それで、そういうことを、じゃあ、なんでなんだろうって、いろいろ考えたりするのですが、僕、2013年、トルコから帰って来た時に映画を見て、その映画の中で子どもが母親をほしいと叫ぶのがあるのですよ。児童養護施設の子どもの保育士さんに、お母さん、お母さんって言うのですよね。お母さん、なんでいないのとかって言うのですね。すごく泣き叫んでいて、僕は初めてその時に、「あ、俺も欲しい』っていうふうに思ったのです。今までは僕、思ったことなかったのですよね。思っていたのかもしれないのですが、こういうふうに思っていたとは思っていませんでした。無意識のうちにはあったかも知れないのですが、意識的に初めて僕、「お母さんが欲しい』って思いました。

これ、最近なのですけど、ほんとに、僕、多分、誰かに認められたいとか、頑張っているねって言われている人たちに頑張っているところを見せて、頑張っているねって。また、認められるということは、多分、あまり、もちろんそれも知っているのかもしれないのですが、思ったのですけど、僕、多分、母親に認めてほしいのです。

今、いろんなことをなんで頑張れているのとかっていうと、やっぱり僕は母親に否定されて母親は死んでい

たというふうに思っていますし、僕も母親を否定して、母親が死んでしまったというような感覚はすごく強くて、多分そこを、母親に頑張っているね、じゃないですけど、そうじゃなかったのだよ、じゃないですけど、きっと認めてほしいのだからって、ほんとに最近なのですよね。何か思ったのです。でも、母親いないですよ。死んじゃっているのです。どうしようという感じですね、今。どうしようもないのですけど、どうしようかになって、今思っている、すごくリアルな生きづらさみたくないものだと思うんですけど。そういう気持ちがあります。

まあ、このようにいろんなお話をさせていただいたのですけど、あんまり僕の話、今日の話は「自死遺児」というお話ではないのかなと思っています。村尾政樹という1人の人間のお話、すごくおこがましいのですけれども、そうだと思ってもらえれば嬉しいなとか、助かるなというふうに思います。

僕は、今までそういうふうに振り返ってきて、そういうふうに専門でカウンセラーのかたとか看護師さんとか非常に貴重なお仕事をされているのだからって思うのですけど、僕はすごく見えづらい支援とか、さりげない支援とかというものが、すごく尊厳みたいなものを守りつつ生きてこられたなという感覚が強くて。「自死遺児」の村尾ってられるの僕、すごく嫌いなのですよね。「自死遺児」の村尾って、何かいやなのです。村尾は自殺で母をなくしちゃったようなことは構わないのですけど、なんとも思わないんですけど、なんでなのかなって思うんですけど、やっぱり、人と人って、いわゆる多分、男のくせとか女のくせとかいうのと同じような感覚なのかなというふうに思っていて、「自死遺児」だからとか「自死遺児」の村尾とかって言われるのは、何言っているんだってられるかもしれないんですけど、僕はすごくいやで、あくまで村尾という人間と、その人というお付き合いができていないかできていないかというのは、すごい僕にとっては重要だと思っています。ここの下に、それいつも僕、当事者でいるというわけじゃなくて、必要な活動をする時とか、なにかをやるという時に逆に、僕はそういう「自死遺児」として活動をしていますというのか、その当事者になっているというような感覚なのですよ。四六時中、事実としては確かに母親を亡くしたと言われるかもしれないんですけど、僕の感覚としては、いつも村尾なのですよ。普通のいつも村尾なのですけど。その村尾の当事者というのは、健康その時々によって、なったりならなかったりしています。今は、あまり「自死遺児」という話、そのようなのはないです。1人の人間としてお話しさせていただいているという感じですね。

よく、こういう話をさせていただくと、何をしたらいいですかとか、なにがやらないといけないのですかね、とか言われるのですけど、僕は先ほど言ったように基本的には、村尾という、普通の人間だと僕は思っている。なにを、お友だちとかになつたりとか、人間関係を築く時に、何をしなきゃいけないのかなとか、何をすべきなのかなって言うのよりも、まずは、そういうなにをしちゃいけないのかなとか、何をしない方がいいのかなというのを大事にしてくれた方が、それが一番だなんていうふうに僕は思っているのですよね。

何かというのは、逆に友だちになる時に、何かをするから友だちになれるとか、なにかをするから関係性がくれるというよりか、やっぱり、してはいけないというか、何かしてほしくないなということがあって、そういうことなのかなって、基本的には「自死遺児」だとかいろいろあると思いますけど、私個人はそういうふうに思っています。

最後にということなのですが、このテーマにつけた「生きづらさを生きる力に」というのは、お話しさせていただいたとおり、実はあまり答えじゃないのですよね。僕のテーマなのです。向き合っています。非常に生きづらいついて思うことがあるのですけれども、それをこのあとのシンポジウムとか、皆さんと本日、短い時間ですけれども、一緒に考えることができたらなというふうに思っています。

阪神淡路大震災のことについても、少しだけ触れておかないといけないと思っています。

1月17日というところから20年たちました。私、神戸市の灘区というところ出身で、これ僕の家ではないのですけど、僕の家は隣の隣です。

それで、これ僕の自宅なのですけど。手前にある家。さっきのこの写真、僕の弟の今、幼なじみの人が、また新しい家を建てて住んでいるのですけど、このあとは原っぱになって、僕の秘密基地みたいな場所だったので。逆に震災起きたら、次の日というのは、僕の場合、小さかったので明確に記憶があるわけじゃないのですけど、こんなふうになっていたのだということとか。

これ、僕の家なのですけど、そういうふうになっていたということなのですけど。

非常に、よく生きてきたなと思いますね。偶然だなというような感じが。僕の家、ちゃんとまだ、なんとかおかげさまで倒れずに済んだのですけれども。隣がこういう状態になったので、よく生きていたなと思っています。神戸の人とか、もしくは僕にとっては、この20年というのはやっぱり非常に感慨深いなとか、いろいろ考えることが多くて、そういった日にこういうお話をさせていただいて、非常に感謝しています。

あとは、ほんとに「ここわらねっと」というのがあって、そういう活動がどういうことをしていますよという写真とかも、ご用意させていただいたりしています」。

トルコでの1年間、こんなふうに過ごしてみましたみたいな写真があったりですね。

あしなが育英会の奨学金を借りていたので、これ、震災の時だったのですが、こういう募金活動とか、そういういろんな活動もしていました。

これ、高校生のキャンプで、僕はさっき大きな転機の1番目の、逆に僕が大学生になってお兄さん、お姉さん役として、こういう場に行つてこういうことをしていましたという。で、アフリカの子どもにも支援というのか、そういうのをしている、そういう写真とか、いろんな写真があったのですけれども。

まあ、ほんとに今日、つたないお話だったと思うのですが、この後のシンポジウムで皆さんからの質疑とかも受けたいなと思っていますし、率直に聞いちゃいけないことといよりか、なんでも聞いていただけたらなと思っています。

それでは、とりあえず私のお話は終わりたいと思います。

どうもありがとうございました。

【飯田 昭人】

村尾さん、本当にどうもありがとうございました。今日のお話をうかがい、本当はとても話しづらいことを、今回の企画でお話をいただきましたことを改めて痛感いたしました。こういう経験が村尾さんの心の傷を広げてしまうのではないかと葛藤しております。しかし、今日の村尾さんのお話を聞いて、参加された皆様は、必ず何か感じ、考えることがあったと思います。

つづけて、休憩後は指定討論者である、北海道大学保健センターの斉藤美香先生にお話しをしていただきます。

斉藤先生、よろしく願いいたします。

【斉藤 美香】

北海道大学保健センターの斉藤です。村尾さんの貴重なお話をお聞かせいただきありがとうございました。

私の立場で聞かせていただいて感じたことを1つお伝えして、あと1点、フロアのかたが、やはり専門に仕事をされているかたが多いようなので、その代表でもないのですが、1点だけ質問をさせていただいて、皆さんと質疑を持とうというふうにしたいと思います。

僭越ですが、私は大学の方で働いていて、やはり大学生が亡くなっていく、自殺で亡くなっていくということに対して、なんとかならないものかと思って、

日々、さりげなくじゃなくて、すごく目立つというか、自殺予防対策みたいなことをしていて、それ自体の仕事は必要だと思ってやってはきてはいましたけれども、やはりそれだけで、何かかゆいところに手が届いていないとか、何かピントがずれているというふうにとずっと問題意識を持っていたのですね。今日、村尾さんの話を聞いて、あ、こういうことだったのかなあって、少し糸口が見えてきたような気がしました。まだ、ハッキリはしていませんけれども。

少し、込み入ったことを話すと、自殺で亡くなった方というのは、いろんな学生さんがいて、確かに居場所がないというかたもいるのだけれども、今日、村尾さんが話したように、きっと村尾さんも外から見ていると、あ、村尾さんすごい活動していろいろやって強い方だというふうなふうに思われていると思うのですけれども、亡くなった学生の中には表面的には就職も決まって素晴らしい将来が開けていて、成績もよくてという、はたから見るとどうしてそういうことで亡くなってしまったのって、みんながわからないような学生も中には数名おります。そして、どうしてというふうにした時に、今日、村尾さんが、いつ死んでもいいのだという気持ちをずーっと通奏低音のように持って、何年も生きて来られたということが、聞いた時に、もしかしたら、その学生たちも何かそういう思いにずっといながらも、日々生活をしてきて、でも主観的な自分の何かこう生きる壁、生きるのと死ぬのが、村尾さんはすごい壁が薄くて穴が空いているとおっしゃっただけでも、そういうものが個人的に、もしかしたらあって、本当に何かのきっかけで、その時は誰にも相談をすることをせず、咄嗟的に自殺という手段をとられてしまった可能性もあるのではないかなというふうに1つ感じました。

そこで、私の立場としては専門家というか、支援者として、何ができるのかなということが、やはり考えたいなということで、1つ思ったのは、尊厳を守ってさりげなく周りの人に支えてもらったという言葉がすごく印象



的で、その尊厳を守るといことはどうなのだろうということと、やはり専門家のところに相談に行くということも、ある意味尊厳が、人に援助を求めるといのは、自分の尊厳を守るといものとすごく相反するものの側面も絡んでいるような気がして、そこでわれわれ相談を受ける者にはその尊厳を守るといところをもっと慎重に考え、大事に考えていかなければいけないというふうに考えました。

すごくまとまりがないのですが、そういうようないろいろなヒントを今日のお話でいただきました。

それで、1点、質問なのですけれども、村尾さんのお話を聞いていると、どこかの時点で、もう、ちょっと専門のところに相談に行こうかなと思われた時期がきつくないのだろうというふうに、その必要もなかったんじゃないかなと思うのですけれども、もし村尾さんの立場であって、これは周りの友だちじゃなくて、何か専門の知識を持った人のところに行ってみようかなということがあったとしたら、それはどういう時で、どんな人やどんなところというか、どんな要因を選ぶだろうなというのを個人的にお聞きしたいと思いました。

【村尾 政樹】

はい。ありがとうございます。

本当に、僕という人間はということですが、いろんな人がいるので、いろんな考え方があるかも知れませんが、僕はやっぱりそういうカウンセラーのかたとか、医療のかたにかかるといことは、まず頭になかったというか、まず、気持ちも全然なかった。1つは、信用的なものではなくて、お金がなかったのですよね。僕、やっぱり小学校6年生だった時に、父子家庭だったので、世帯的なものとしては、まだ母子家庭の非常に辛い中、なんとか踏ん張っているお母さん方もたくさんいらっしゃると思います。家庭的に世帯的には余裕があったほうだと思うのですが、僕、結構、父親と僕って、どこか切り離されている感が強くて、基本的に生活する時は、僕やっぱり自分の、高校からはアルバイトのお金とかで生活していて、そういったところに行くといことは、僕、医者にかかるといことが、そもそもできないという意識がすごく強いですね。お金かかるというのがあるって、それが強いかなというのがあるのです。

カウンセラーに関しては、とにかくそういう学生の相談室とかがあるよというのを知っていたのですけれども、小学校6年生のその亡くした時に、カウンセラーさんが学校に来ていて、学校の先生に勧められてその部屋に行かされたということがあったのですよね。それで、何かあったら話しなさいといことで、何もなければ話さなくてもいいよみたいな形で、そのおばさんだっ

たですけど、おばさんと一緒にいて、非常に僕、ドッジボールがその時はしたかったのです。ドッジボールがしたかったので、その何かあれば話せばいいからねといのがすごい困ったというか、そこが何か僕、違和感みたいなものがあるって、敢えて心情的な感じで言うと、一緒にドッジボールしてくれたらよかったとか、わからないんですけど。何か、そういうのがあるのかなと。個人的な経験からは思っています。

あとは、そういうお金がないからといところが大きいですかね。別に心情的な、心とかなんとかといことだけじゃなくて、基本的に僕、なんでもそうなのですけど、医者にかからないのですね。風邪引いて病院に行かないですし、それこそ、やっぱり次の日起きて生きていたらいいなと思いつつ寝たこととかもありますし、それも逆に言うといつ死んでもいいやといのとあれなのかも、それで死ぬんならといのがあったかもしれないですけど。

なので、ご質問は、そういうことだと。経済的な理由として、そもそも行けないのじゃないかとい気持ちといか、そういう環境的に行けないといふうなのが念頭にあったといのと、あとは小学校の時の連れて行かれた時にそういう経験があつて、ドッジボールがしたかったといようなことですね。

【斉藤 美香】

ありがとうございます。

※その後も質疑応答は続いているが、それについては割愛させていただきます。

【文献】

- 1) 飯田昭人 他4名 (2014) 北翔大学ポルト市民講座「青年期の自殺予防を考える」北翔大学北方圏学術情報センター年報 vol. 6
- 2) 石本雄真 (2010) 青年期の居場所感が心理的適応、学校適応に与える影響。発達心理学研究第21巻第3号
- 3) 内田千代子 (2014) 大学における休・退学、留年学生に関する調査第34報。第35回メンタルヘルス研究会報告書
- 4) WHO (2014) Preventing Suicide: a global imperative.